

令和3年度東京都障害者虐待防止・権利擁護研修

身体拘束・行動制限の廃止と 支援の質の向上

社会福祉法人同愛会

東京事業本部

練馬区立大泉つつじ荘

事業所長 竹矢 恒

この時間で学ぶこと

- 身体拘束を廃止すべき理由
- 身体拘束の3要件
- 座位保持装置等に付属するベルト・テーブルの使用
- 強度行動障害の正しい理解
- 強度行動障害の状態にある方が虐待に合いやすい事実の確認
- 強度行動障害の状態にある方への適切な支援
- 強度行動障害支援者養成研修の概要

身体拘束について

- 身体拘束を廃止すべき理由
- 身体拘束の3要件
- 座位保持装置等に付属するベルト・テーブルの使用

前提として障害者虐待防止法

「正当な理由なく障害者の身体を拘束すること」は身体的虐待に該当する行為とされています。

まずは、「身体拘束」は「虐待」であるという認識が必要です。

当然、**身体拘束は廃止されるべき事**です。

どんな内容が身体拘束に該当するのか？

- ① 車いすやベッド等に縛り付ける。
- ② 手指の機能を制限するために、ミトン型の手袋を付ける。
- ③ 行動を制限するために、介護衣（つなぎ服）を着せる。
- ④ 支援者が自分の体で利用者を押さえ付けて行動を制限する。
- ⑤ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。
- ⑥ 自分の意思で開けることのできない居室等に隔離する。

“やむを得ず”

注意が必要なワンフレーズ
「やむを得ない場合を除き」

やむを得なければ身体拘束をしても許されるのでしょうか？

ここがポイントです！

「やむを得ない」 ですか？

- **人手不足で利用者の安全が確保できません。**

→

- **支援力不足（ケアの質）で事故の可能性が...**

→

正当な理由？

虐待防止法では

「**正当な理由なく**」 障害者の身体を拘束する事は、「虐待」

ちょっと待て。正当な理由って何だ？

→ **誰にとって正当な理由**なのか？

“やむを得ず”身体拘束を行う時の留意点

緊急やむを得ない場合を除き身体拘束等を行ってはならないと記載されています。

「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」

では「緊急やむを得ない」時とは？

やむを得ず身体拘束を行う場合の3要件

「緊急やむを得ない」時の視点

①切迫性

利用者本人又は他の利用者等の生命、身体、権利が危険にさらされる可能性が著しく高いことが要件となります。切迫性を判断する場合には、身体拘束を行うことにより本人の日常生活等に与える悪影響を勘案しそれでもなお身体拘束を行うことが必要な程度まで利用者本人等の生命又は身体が危険にさらされる可能性が高いことを確認する必要があります。

「緊急やむを得ない」時の視点 ②非代替性

身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する方法がないことが要件となります。非代替性を判断する場合には、まず身体拘束を行わずに支援する全ての方法の可能性を検討し、利用者本人等の生命又は身体を保護するという観点から、他に代替手法が存在しないことを複数職員で確認する必要があります。また、拘束の方法についても、利用者本人の状態像等に応じて最も制限の少ない方法を選択する必要があります。

「緊急やむを得ない」時の視点

③一時性

身体拘束その他の行動制限が一時的であることが要件となります。一時性を判断する場合 には、本人の状態像等に応じて必要とされる最も短い拘束時間を想定する必要があります。

その上で厳格な手続きが必要

やむを得ず身体拘束を行う場合の3要件を満たしても、更に**厳格な手続き**が必要

身体拘束を決して安易に行わず、慎重に判断することが求められています。

- ◆組織による決定
- ◆個別支援計画への記載
- ◆本人・家族への十分な説明
- ◆必要な事項の記録

組織による決定

やむを得ず身体拘束を行うときには、個別支援会議等において**組織として慎重に検討・決定する必要があります**。この場合、管理者、サービス管理責任者、運営規程に基づいて選定されている虐待の防止に関する責任者等、支援方針について権限を持つ職員が出席していることが大切となります。

個別支援計画への記載

身体拘束を行う場合には、**個別支援計画に身体拘束の様態及び時間、緊急やむを得ない理由を記載**します。これは、会議によって身体拘束の原因となる状況の分析を徹底的に行い、身体拘束の解消に向けた取組方針や目標とする解消の時期等を統一した方針の下で決定していくために行うものとなります。ここでも、利用者個々人のニーズに応じた個別の支援を検討することが重要となります。

本人・家族への十分な説明

身体拘束を行う場合には、これらの手続きの中で、適宜利用者本人や家族に十分に説明をし、了解を得ることが必要となります。

必要な事項の記録

必要な事項の記録 また、身体拘束を行った場合には、その様態及び時間、その際の利用者の心身の状況並びに緊急やむを得ない理由等必要な事項を記録します。なお、「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律に基づく指定障害者支援施設等の人員、設備及び運営に関する基準」では、身体拘束廃止未実施減算が定められているため、必要な記録がされていない場合は、運営基準違反に問われる場合があります。

身体拘束廃止未実施減算

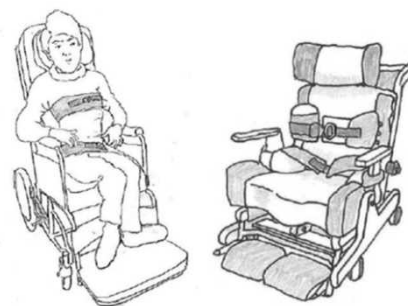
平成 30 年度障害福祉サービス等報酬改定において、身体拘束等の適正化を図る為、身体拘束等に係る記録をしていない場合について、基本報酬を減算する「身体拘束廃止未実施減算」が創設されました。

《身体拘束廃止未実施減算》 5 単位／日

座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

座位保持・座位保持装置の視点

①車椅子等に座った時に、姿勢をしっかりと保持（維持）するここで、背もたれ、座面等の機能がその人に合うように調整される必要があります

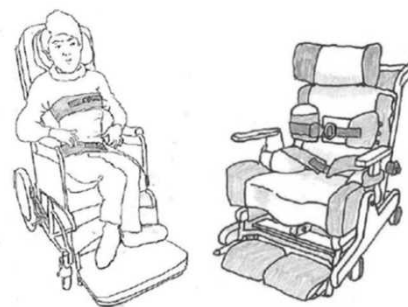


(座位保持装置等の例)

座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

座位保持・座位保持装置の視点

②褥瘡予防（座圧）、移動保障の視点等
も踏まえ、アセスメントを経て、その人
のQOLを高める上で車いすユーザーには
不可欠な機能と言えます



(座位保持装置等の例)

座位保持装置等に付属するベルト・ テーブルの使用について

座位保持・座位保持装置の視点

③身体に重度の障害のある人の中には、
脊椎の側わんや、四肢、関節等の変形・
拘縮等の進行により、身体の状態に合わ
せ体幹の安定等のため座位保持装置や車
いすを医師の意見書又は診断書により
オーダーメイド等により製作し、使用さ
れている方も少なくありません。そのた
め安全かつ安楽に座位が維持されるよう
にベルトやテーブルも使用されます

一概に身体拘束にあらず

ベルトやテーブルを身体拘束にあたるとして、ベルトを外し転落したり、怖い思いをされるということが各所で起きています。そのため危険を回避しようとして、ベッド上での生活を強いるなど不適切な対応を招くこともあります。むしろベルトやテーブルを外すことで危険を招く場合があります

身体拘束との違い

座位の安定、移動の自由、快適な暮らしを維持するために、ご本人（場合によってはご家族）の意思で、適正な手続きを踏み、適宜見直されていれば、「身体拘束」同様の詳細な記録は求められていません。その目的や対応に応じて適切に判断される必要があります

記録は？

平成31年3月29日付け厚生労働省障害福祉部障害福祉課事務連絡では「ケア記録等への記載については、必ずしも身体拘束を行う間の常時の記録を求めているわけではなく、個別支援計画に記載がない緊急やむをえず身体拘束を行った場合には、その状況や対応に関する記載が重要である」（障害福祉サービス等報酬に係るQ&A）と明記されました

ただし！
座位保持装置でも留意点は守る必要があります

ベルトやテーブルをしたまま障害者を椅子の上で長時間放置するような行為については身体拘束に該当する場合もあるため、座位保持装置等に付属するベルトやテーブルの使用であれば一律に身体拘束ではないと判断することも適当でないのは当然のことですので留意が必要です。

ただし！
座位保持装置でも留意点は守る必要があります

座位保持装置等を漫然と長時間使用することを防ぐためには、個別支援計画に座位保持装置等を使用する場面や目的、時間とともに、リクライニングによる体位変換やベッドや他の用具等に移乗して休息する時間についても記載し、長時間の同一姿勢による二次障害や褥瘡を計画的に防止することが必要です。

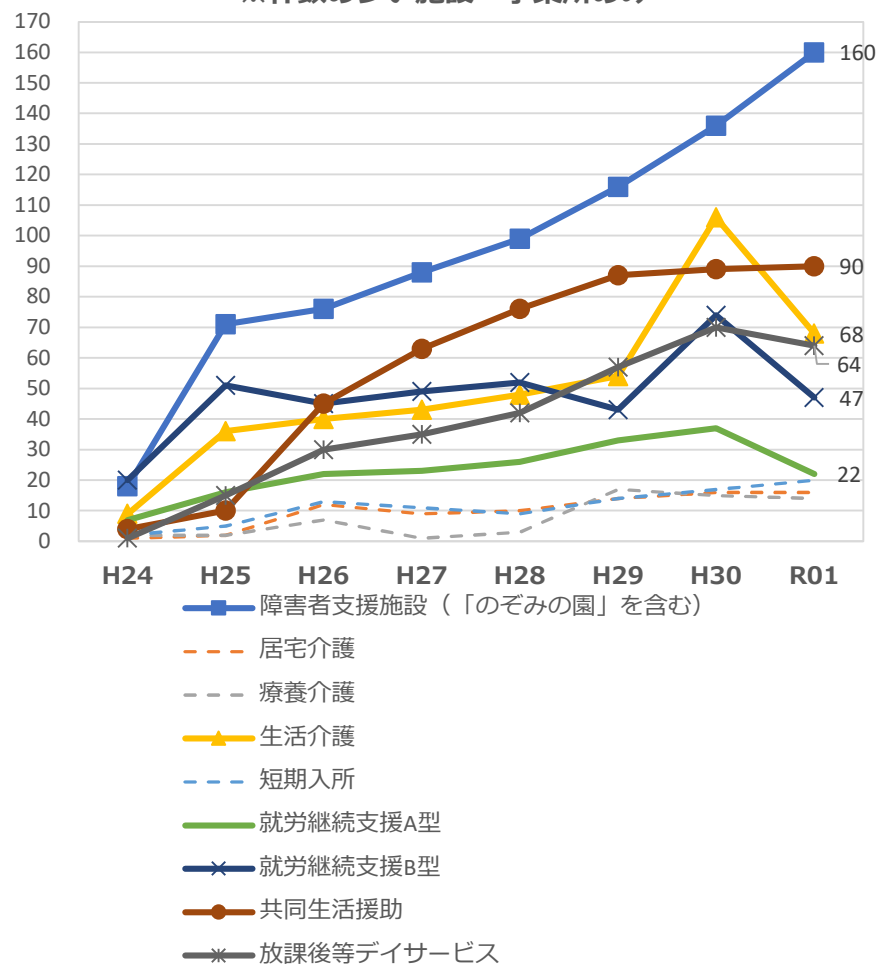
強度行動障害の状態にある方の支援について

- 強度行動障害の状態にある方が虐待に合いやすい事実の確認
- 強度行動障害の正しい理解
- 強度行動障害の状態にある方への適切な支援
- 強度行動障害支援者養成研修の概要

強度行動障害と虐待について

施設従事者虐待：施設・事業所種別

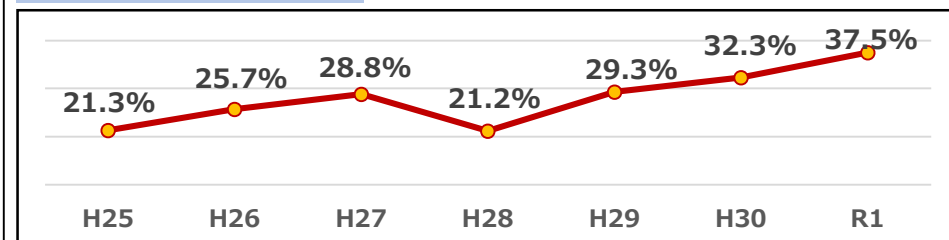
※件数の多い施設・事業所のみ



被虐待者の割合

	身体障害	知的障害	精神障害	発達障害	難病等
H25	29.2%	79.8%	14.1%	6.4%	1.8%
H26	21.9%	75.6%	13.5%	2.3%	0.0%
H27	16.7%	83.3%	8.8%	2.3%	0.0%
H28	14.4%	68.6%	11.8%	3.6%	0.7%
H29	22.2%	71.0%	16.7%	5.1%	2.7%
H30	22.7%	74.8%	13.5%	4.2%	0.5%
R1	21.3%	78.7%	11.7%	3.7%	1.2%

行動障害のある者の割合

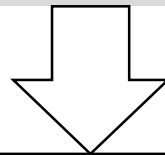


発生要因の割合

市区町村等職員が判断した虐待の発生要因	H27	H28	H29	H30	R1
教育・知識・介護技術等に関する問題	56.1%	65.1%	59.7%	73.1%	59.8%
職員のストレスや感情コントロールの問題	42.0%	52.2%	47.2%	57.0%	55.3%
倫理観や理念の欠如	43.9%	53.0%	53.5%	52.8%	53.6%
虐待を助長する組織風土や職員間の関係性の悪さ	24.8%	22.0%	19.1%	22.6%	16.2%
人員不足や人員配置の問題及び関連する多忙さ	23.0%	22.0%	19.6%	20.4%	24.2%

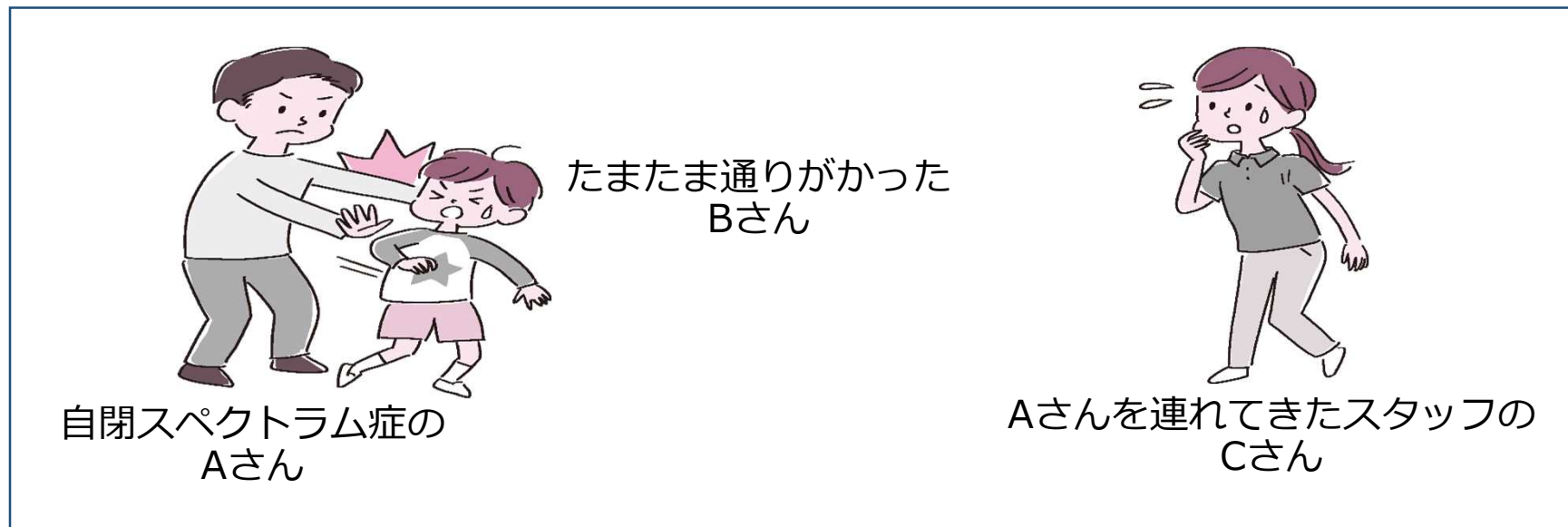
強度行動障害とは？

自傷、他傷、こだわり、もの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語



- × もともとの障害
- その人の状態のこと

- ・あるショッピングモールでの出来事です。
- ・放課後等デイサービスの活動の一環で、数人の子どもたちと一緒に買い物体験に来ていたAさん。
- ・あるショッピングモールで、たまたま通りかかったBさんを押してしまいました。
- ・困っているのは誰でしょう？



一般的には、「わけのわからないまま押されてしまったBさん」
「Aさんを連れてきたCさん」

と答える人が多いかもしれません。

実は、Aさんも困っています。
なぜなら、ショッピングモールのようなうるさい環境が苦手なほか、
そういった環境にいつまでいなければいけないのか分からないからです。

「うるさくていやだよ～」
「いつまでここにいなければいけないの？」
「はやく帰りたいよ～」

障害により、こういった気持ちを言葉で
上手に伝えることができない

その困り具合を・・・

“目の前に通った子を押す”という行動で表現



だから答えは、「みんな」です

ということを、この研修の受講者には理解して欲しいのです。

Aさんのように、障害からくる苦手さを持つ人たちは、困っています。

障害からくる苦手さ

先の予測をすることが難しい

見えないものの理解が難しい

話し言葉の理解が難しい

抽象的であいまいな表現の理解が難しい

話し言葉で伝えることが難しい

やりとりの量が多いと処理が難しい

少しの違いで大きな不安を感じる

聴覚の過敏や鈍麻がある

⋮



不安

緊張



不安や緊張から

逃れたい

不安や緊張を

伝えたい

不安や緊張に

気づいてほしい

でも方法がわからない



気持ちを **行動** で表す



- そのまま、障害からくる苦手さが解消されないと、さらに、激しい行動をとることがあります。



- また、適切な行動を教えてもらう機会がなかったり
- 自分の気持ちを伝えるために激しい行動を取った時、周囲がその行動を止めるために本人が望むままの対応を繰り返していると、「激しい行動をすることで自分の気持ちが伝わる」と理解し、激しい行動が定着してしまうこともあります。

このように、

- ☑ 適切な行動を教えられていない
- ☑ 周囲が誤った対応を繰り返す



行動が激しくなっていく

= 「強度行動障害の状態」

といいます。

▶適切な支援がない場合

Aさんの事例で考えてみましょう



知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

「うるさいのが苦手」「いつまでいるのかわからない」

苦手な環境が続く（言葉で上手く伝えられない）。



（自分の気持ちを表すために）近くを通った子を押す。



ショッピングモール 立ち入りを断られる

買い物ができない

生活の範囲が狭まる

事業所から利用を断られることも……。そして、より行き場のない生活へ

▶適切な支援がある場合

知的障害を伴う自閉スペクトラム症のAさん

本人の特性に合わせ、騒がしくない時間帯にお店に行く
いつまでお店にいるか本人にわかるように伝える。

「合理的配慮」 といいます

「分かる」 「快適」

「充実」 「安心」



・外出を楽しむ ・違うお店でも買い物ができる

社会参加が進む

地域の中で安心して幸せな生活ができる



強度行動障害の状態になっている人は、
「**困った人（子）**」ではなく「**困っている人（子）**」

= 合理的配慮が必要な人

私たち支援者は、
私たちの理解や配慮によって

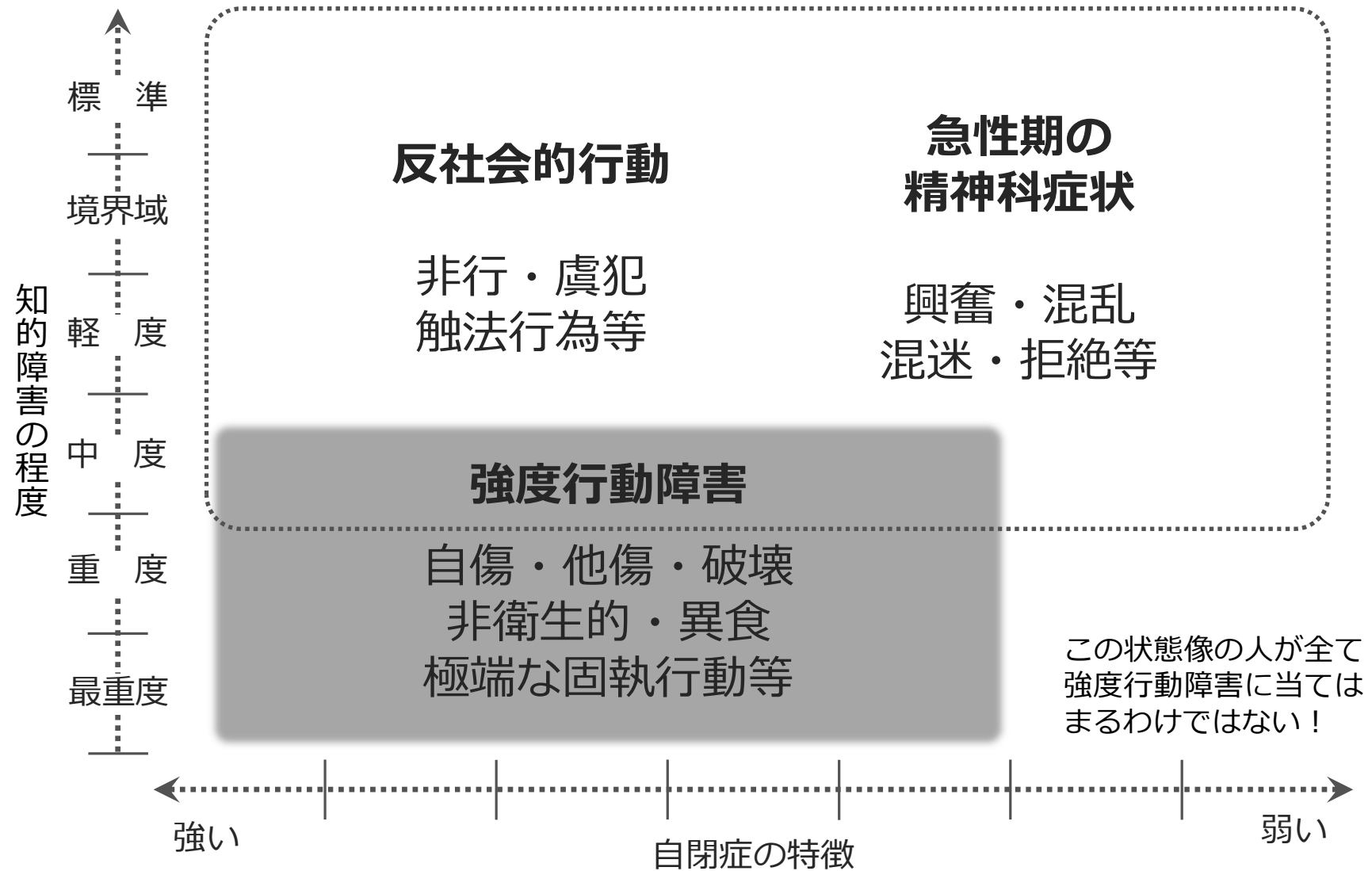
- ☒ 強度行動障害の状態にならないよう**予防**することができる
- ☒ 既に現れている強度行動障害を**軽減**できる

そして

- ☒ 彼らの**社会参加**を進めることができる

ということを認識することが大切

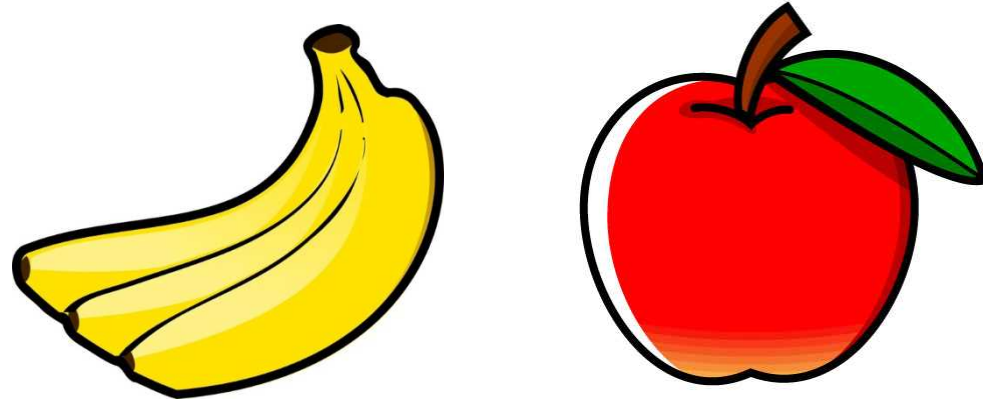
強度行動障害になりやすいのは



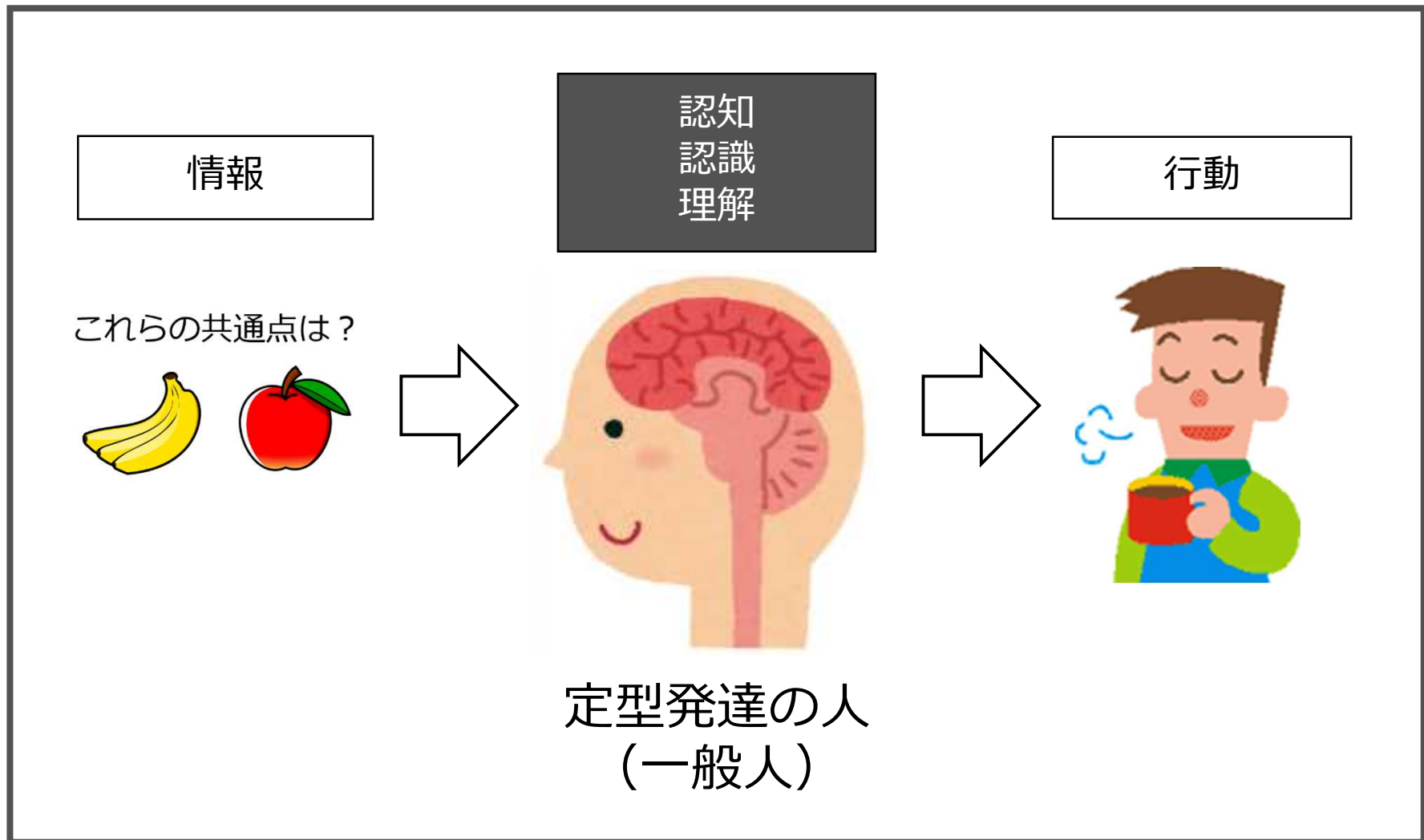
自閉症について

- 現在、自閉症のことを正式には「自閉スペクトラム症」もしくは「自閉症スペクトラム障害」と呼びます。いろいろなタイプがいて、境目のない連続体として広がっているという考え方です。
- 自閉症は、社会性やコミュニケーションの困難、想像力（目の前にないことをイメージすること）の困難が診断基準となり、感覚の特異性も診断の際に考慮されます。

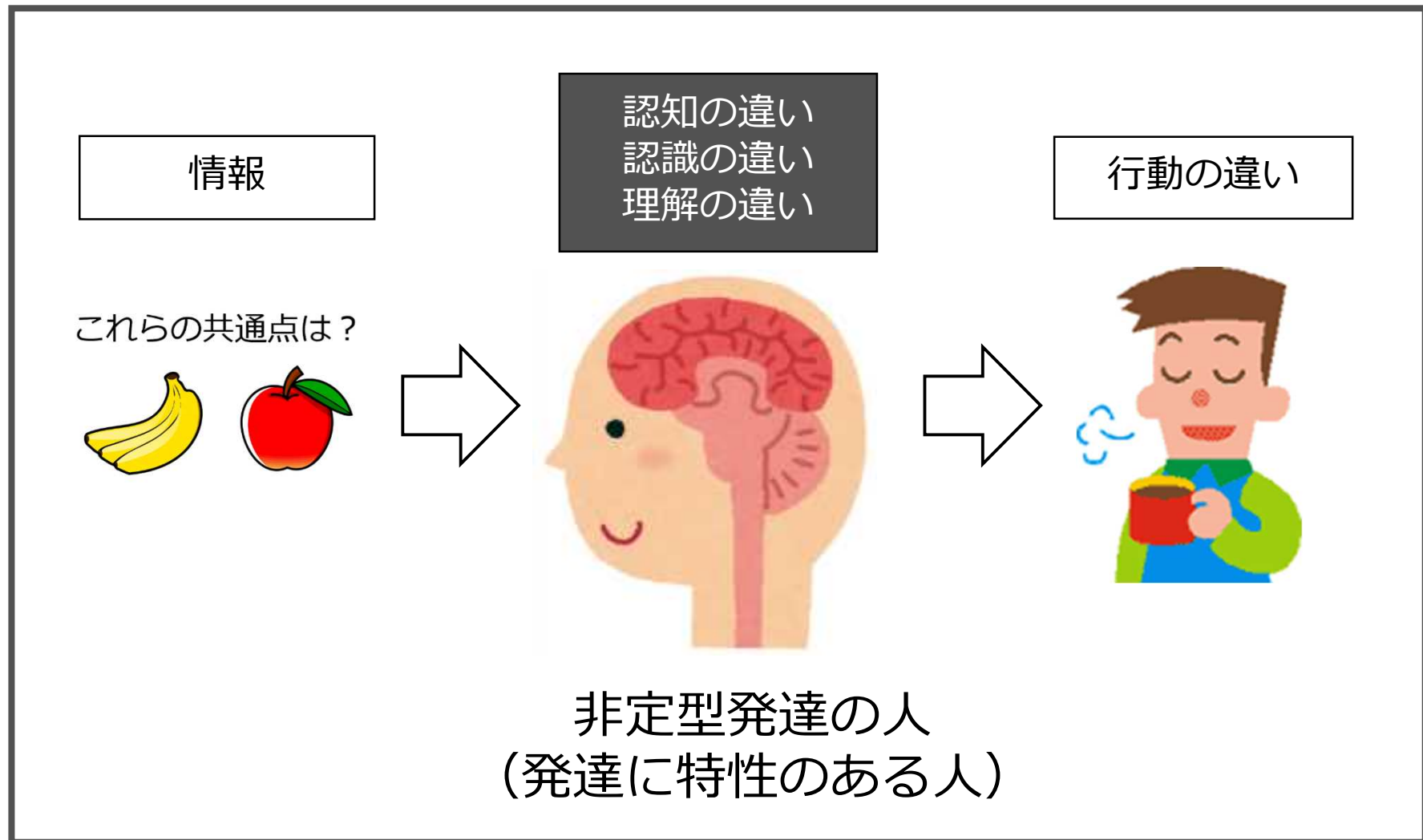
これらの共通点は？



人は情報を脳で処理をして行動をしている



自閉症は脳の機能的な障害



強度行動障害の適切な支援

障害特性への合理的配慮の視点

それぞれの障害特性を理解し、得意な部分は生活に活用し、苦手な部分へ寄り添うことが大切。

まずは特性の理解！

なぜ、自閉症の特性を整理するのか

自閉症の人たちは社会では少数派です。

その物事のとらえ方は、多くの人たちとは異なります。

自閉症の人たちがどのような物事のとらえ方をしているのかは、特性を把握し整理することで見えてきます。

特性とは

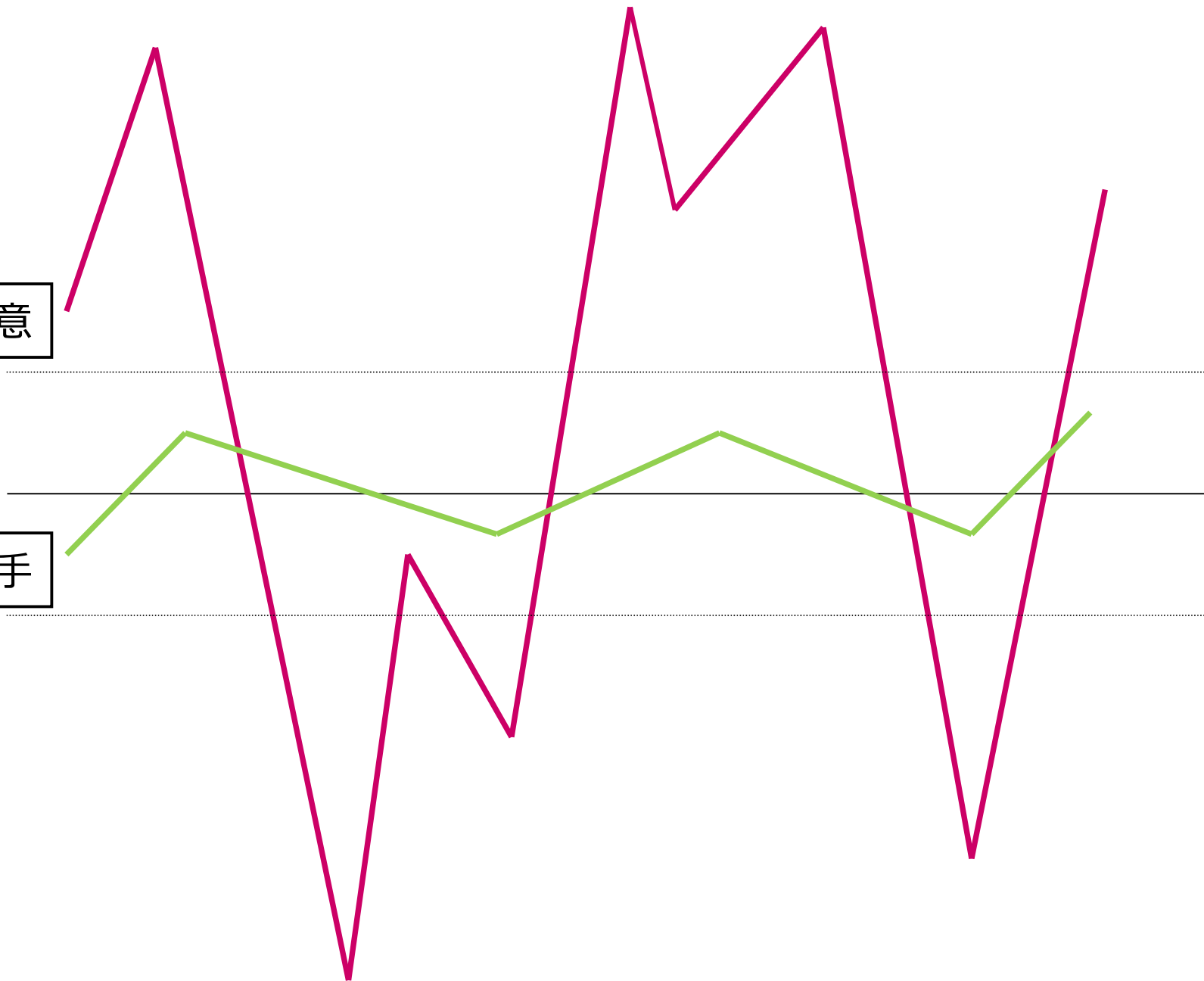
「強み」と「弱み」と言い換えることもできます。

「強み」は支援に生かすもので、
「弱み」は支援者が配慮するところ と言えます。

それゆえ、特性の把握においては、
「強み」と「弱み」の両面を整理しておくことが重要
です。

得意

苦手



- 自閉症の人たちの

物事のとらえ方に合わせた支援をすることで、
自閉症の人たちは適切に学ぶことができ、
強度行動障害という状況に陥ることなく、
よりよい生活を送ることができます。

- 私たちは、自閉症の人たちの特性を常に学び、
支援の基盤に置く必要があるのです。

ここでは、自閉症の特性を次のように整理しています。

- 社会性の特性
- コミュニケーションの特性
- 想像力の特性
- 感覚の特性

視点① 社会性の特性

【人や集団との関わりに難しさがある】

- ・相手への関心が薄い
- ・相手から期待されていることを理解することが難しい
- ・相手が見ているものを見て、相手の考えを察することが難しい

【状況の理解が難しい】

- ・周囲で起きていることへの関心が薄い
- ・周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい
- ・見えないものの理解が難しい

☆自分がすべきことが明確であれば、集団への適応が増す。

視点② コミュニケーションの特性

【理解が難しい】

- ・ 話し言葉の理解が難しい
- ・ 一度にたくさんのことを理解するのが難しい
- ・ 抽象的であいまいな表現の理解が難しい

【発信が難しい】

- ・ 話し言葉で伝えることが難しい
- ・ どのようにして伝えたらいいか分からない
- ・ 誰に伝えていいか分からない

視点② コミュニケーションの特性

【やりとりが難しい】

- ・ 場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい
- ・ 表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい
- ・ やりとりの量が多いと処理が難しい

☆話し言葉だけではない、たとえば目に見えるツールを活用することで、伝達度が増す。

視点③ 想像力の特徴

※想像力：目の前にないことをイメージする力

【自分で予定を立てることが難しい】

- ・ 段取りを適切に組むことが難しい
- ・ なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
- ・ 今やることを自分で判断することが難しい

【変化への対応が難しい】

- ・ 先の予測をすることが難しい
- ・ 臨機応変に判断することが難しい
- ・ 自分のやり方から抜け出すことが難しい

視点③ 想像力の特徴

【物の一部に対する強い興味】

- ・ 興味・関心が狭くて強い
- ・ 細部が気になり違いに敏感
- ・ 少しの違いで大きな不安を感じる

☆目の前に存在する視覚情報があるとわかりやすさが増す。

☆自分が興味・関心のある対象への思いが強みになることも多い。

視点④ 感覚の特性

【感覚が過敏または鈍感】

- ・聴覚の過敏や鈍麻がある
- ・視覚の過敏や鈍麻がある
- ・触覚の過敏や鈍麻がある
- ・嗅覚の過敏や鈍麻がある
- ・味覚の過敏や鈍麻がある
- ・前庭覚の特有の感覚がある

☆感覚に関する反応が、心身の状況や調子のバロメーター
となることも多い。

- 目で見てわかる支援をするのはなぜか？
 - 自閉症の人は目に見えないことの意味を理解したり思いを伝えたりすることに苦手さがあるから
 - 複数の情報を処理することに苦手さがあるから
 - 雑多な環境の中から必要な情報に目を向けることに苦手さがあるから

自閉症支援の基本は目で見てわかる支援

- 目で見てわかる支援をするために
 - わかりにくい情報や生きにくい環境で暮らしている人たち。一人一人にわかりやすい形で届けたり整理したりする必要がある
 - = その人に合わせた支援
 - = 合理的配慮

確実に伝えたい6つの情報

- 「いつ」
- 「どこで」
- 「何を」
- 「どのくらい」
- 「どうやって」
- 「次は」

6つの情報を確実に伝えるための 5つの工夫

- 時間の工夫（生活の見通し）
- 場所の工夫（活動との対応・刺激の整理）
- 方法の工夫（やり方・終わり・次）
- 見え方の工夫（ヒント・着目）
- やりとりの工夫
（コミュニケーションツール）

時間の工夫（生活の見通し）

- どんな流れで生活するのかという理解を助ける。
- 言われるがまま（または好き放題）ではなく、自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする。

場所の工夫

(活動との対応・刺激の整理)

- この場所では何をするのかという理解を助ける。
 - 整理整頓は基本中の基本
 - エリア（境界）を明確に
 - 場所と活動とが 1 対 1 対応できれば理想だが…
- 苦手な刺激を少なくするための配慮をする

方法の工夫（やり方・終わり・次）

- 「何を」「どのくらい」「どうやって」「次は」という理解を助けるために

ーやることの内容や数や順序が違ってても進め方は同じという“システム”を提示する。

見え方の工夫（ヒント・着目）

- 見てすぐにわかる情報を提示するために
 - － 必要な情報に注目しやすくする工夫
 - － 見るだけで何をすれば良いかがわかる工夫
 - － 情報や材料が見やすい・扱いやすい工夫

やりとりの工夫 (コミュニケーションツール)

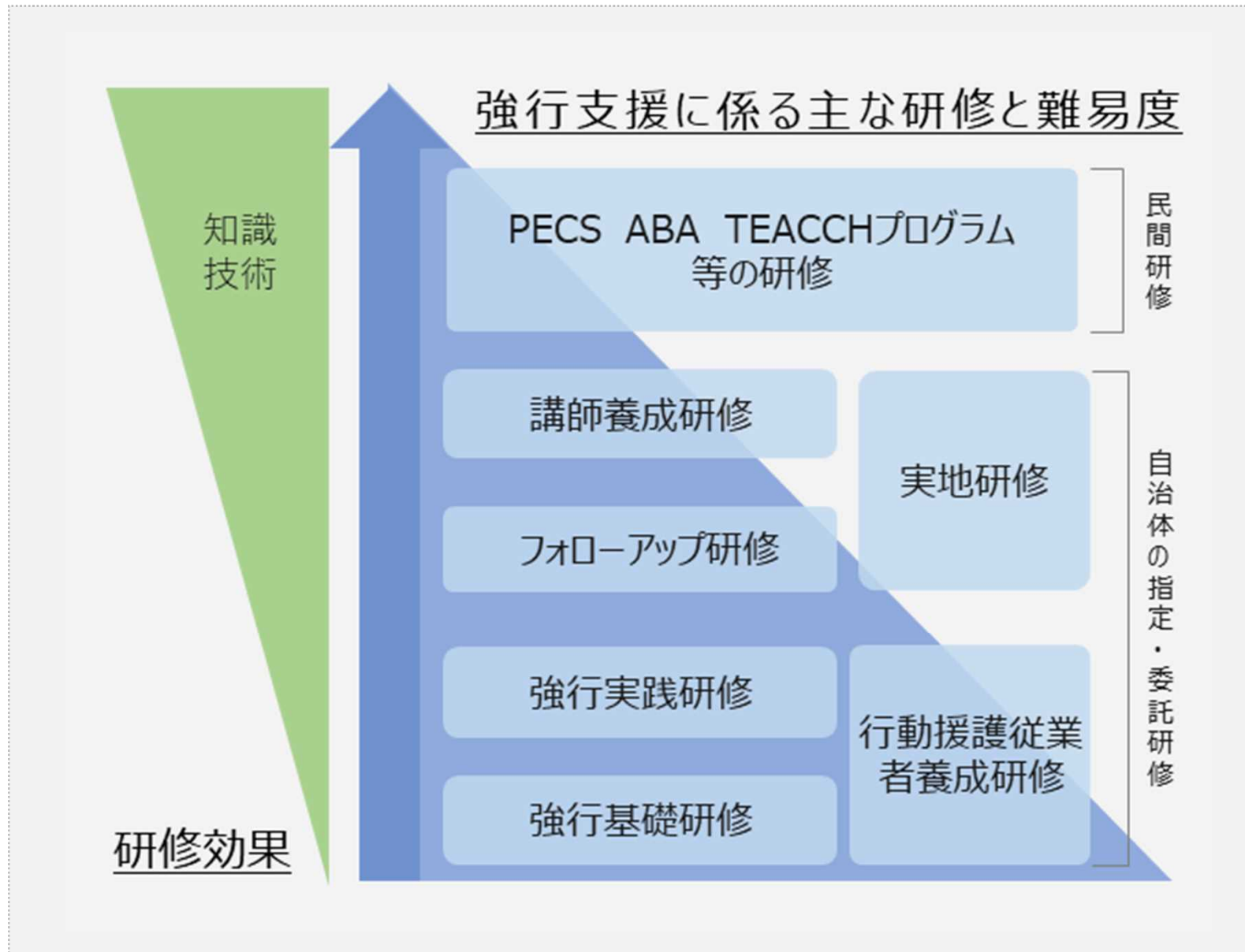
- 伝え合いわかり合うコミュニケーションのために

- ー コミュニケーションの手続きを視覚的に示し、コミュニケーションの成功体験をサポート

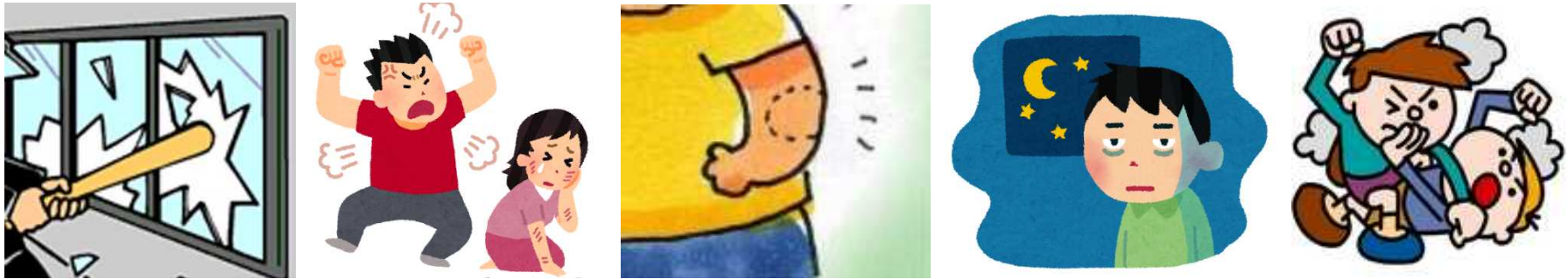
強度行動障害支援者養成研修について

ストーリー	基礎研修	実践研修
Step 1	強度行動障害について基本的なことを知る	支援を組み立てるための基本的な流れの確認
Step 2	アセスメントに基づいた（情報を収集し、解決すべき課題を整理した上での）個別支援の大切さを理解する	アセスメントの具体的な方法を学ぶ
Step 3	支援の具体的な方法を知る	支援手順書の作成方法を学ぶ
Step 4	チームプレイの重要性を理解する	記録の方法と支援手順書の修正方法を学ぶ
Step 5	適切な支援を続けていくための知識を得る	組織として取り組むことの重要性を学ぶ
到達点	計画された支援の根拠を理解し、決められた手順通りに支援をすることができる。	チームの動きをイメージし、支援の手順を考え文章化する。 また、支援結果に合わせ、支援及び手順の修正をすることができる。

強度行動障害が現れている人への支援スキル 修得のためのステップで見る本研修の位置づけ



強度行動障害支援の現場



＊ 日常的に続く、物損，パニック，他傷，自傷，こだわり行動，行動停止等の問題。つまづきの要因が分からない，改善しない状況⇒当事者状態の悪化，支援職の疲弊感。

＊ 成人施設の女性職員の在勤率の高さ
⇒新卒，非常勤女性職員が成人男性のパニックや他傷行為に遇い、リスクが予測されるケースは少ない男性職員の対応交代など、一時的な処置で日々をしのいでいる。

現場のリアルを知る

リアルな“現場”に寄り添う重要性

「虐待はいけません」だけで虐待が減らない理由…。そんなに甘くない。

リアルな現場を知ってますか？

現場だけに任せるのではなく、施設全体で取り組むことが大切。

最後に

強度行動障害の支援とは？

×暴れている人が静かになる

○そもそも強度行動障害の状態に陥ることなく豊かな人生を送る